

Melville の *Typee* におけるアイロニーの構造

水 木 慶 子

— 1 —

And as the moon rose higher...I became aware of the old island here that flowered once for Dutch sailors' eyes—a fresh, green breast of the new world. Its vanished trees,...had once pandered in whispers to the last and greatest of all human dreams; for a transitory enchanted moment man must have held his breath in the presence of this continent,...face to face for the last time in history with something commensurate to his capacity for wonder.¹⁾

引用の文章は、1920年代アメリカの代表的作家 Scott Fitzgerald による *The Great Gatsby* の結びの一節である。この部分において、語り手 Nick Carraway は、ニューヨークの砂浜に横になり、はるか二百年昔、長い航海の末に、この岸べにたどりついたオランダ人移民の感慨に思いをはせているのである。新大陸のみずみずしい緑の大地は、彼ら移民の目には花のごとく映り、彼らは歓喜と驚異の念に満たされながら、「人類最後のそして最大の夢」が実現したと感じたに違いない。周知の通り、コロンブスがアメリカを発見したのは1492年であるが、それよりかなり以前から、ヨーロッパ人の間には、大西洋のかなたに新天地を求めようという動きがあった。一説によると、²⁾既に11世紀の初めにはノルウェー人 Ericson なる人物がアメリカ大陸を発見していたといわれ、ニュージャージーあたりの大西洋沿岸の地域はぶどうが豊かに実っていたので、Vinland または

Wineland という名で一部の人々の間に語りつがれていたという（当然、この名には、旧約聖書に示されているぶどうが豊かに実る地、イスラエル人の約束の地カナンのイメージが重ねられていると思われる。）そして17世紀になると、バージニアへ、プリマスへ、あるいは現在のニューヨークへと、次々に移民が送りこまれた。この中で最も有名なものは、もちろん1620年にプリマスに到着した Pilgrim Fathers の一団である。彼らの多くは、イギリスの国教に反対したため本国に容れられず、信仰の自由を求め、アメリカに「神の国」を建設しようと渡来した人々であった。それゆえ、彼らのアメリカへの脱出は、カナンの地を求めての、イスラエル民族のエジプト脱出によくたとえられる。³⁾ このように、11世紀の昔から、アメリカとは、ヨーロッパの心満たされぬ人々にとっての約束の地、西に開かれたカナンであったのである。

とはいえ、初期の移民の苦勞には言語に絶するものがあったと思われるのだが、時代が下って19世紀に入ると、東部ニューイングランドを中心におこった生産工業と、ほとんど無限の広がりを持つ西部への西漸運動が主な要因となって、アメリカは着実な成長期に入った。そして、人間の可能性と未来を信じる楽天的世界観、ロマンティックな精神がアメリカ全土に広がったのである。アメリカのルネッサンスと呼ばれるロマン主義文学の開花期が訪れたのはこのような状況のもとであったし、また、*Moby-Dick* の作家 Melville が生を受けたのもこの時代だったのだ。

Herman Melville は1819年ニューヨーク市に生まれた。両親とも由緒ある家系の出で、父 Allan は裕福な商人であった。だが、この父には

あまり商才はなかったらしく、やがて商運は傾き始め、1832年、Melville がわずか 12 歳の時に、父は破産し精神錯乱のうちに病死してしまう。この事件は、まだ幼い Melville の心に、生涯いえぬ傷を残したと思われる。それ以後、残された子だくさんの家族 (Melville は八人兄弟の三番目、次男であった) は貧乏に苦しみ、⁴⁾ 親戚のお情けにあずかるつらさを身にしみてあじわうこととなる。父の死と共に、Melville は学校をやめ働きに出る。そして、以後十年間にわたって、銀行員を皮切りに、農場の手伝い、店員、教師、運河の技師などの職業を転々とする。しかし、彼はこれらのどの仕事にも満足出来ず、また、たいして家計を助けることも出来なかった。そして、1839年には彼には何の仕事もなく、⁵⁾ 家族と貧乏からののがれるようにして海へ出てゆく。リバプール行きの商船の船員となったのである。つまり彼の場合には、海はロマンティックな憧憬の対象というよりは、むしろ、年若くして世の中に失望した者にとっての最後の逃げ場であったのだ。⁶⁾ この最初の航海の時には、Melville は一航海だけで家に戻ったのであるが、続いて 1841 年には捕鯨船に乗り組み、ほぼ四年間家を留守にした。この航海中に、彼は、Marquesas 諸島で船を脱走、島の奥地に住む人食い人種 Typee 族の中に迷いこみ、三週間彼らの客として過ごすという体験をした。そして帰国の後、この時の体験に、想像力と本からの知識を織りまぜて完成したものが処女作 *Typee* なのである。これがかなりの評判となり、Melville は思いがけず作家として幸運なスタートを切ることが出来たのであった。この論においては、*Typee* を中心に、ごく初期の Melville の作品世界を探ってみたいと思う。

— 2 —

Six months at sea! Yes, reader,...six months out of sight of land;⁷⁾

Typee は、上述のような、青年船員のうんざり

したような叫び声で幕を開ける。舞台は南太平洋を航海中のアメリカ国籍とおぼしき捕鯨船 *Dolly* 号であるが、この物語の主人公であり語り手でもある青年⁸⁾ は、すっかりこの捕鯨船内の状況にいや気がさしてしまっている。主人公の不満の主な原因は、暴君的な Vangs 船長にある。彼の行為は 'arbitrary and violent in the extreme' であり、船員の不平に対しては 'the butt end of a handspike' (絞り盤の絞り棒の台じり) を速かに行使するだけである (p. 21)。おそらく、Melville は、'bang' (どんと打つ) をもじって 'Vangs' という名を作り出したのであろう。一方、主人公の仲間の船員の方に目を転じてみると、これまた、卑怯でいやしい者ばかりで、彼らの間には仲間割れが絶えないのである。このような船長と船員を結びつけているものと言えば、ただ、金銭による契約関係のみであり、アメリカ文明社会の延長ともいえるこの捕鯨船には、何らの秩序も調和も存在していないことは明白である。

やがて、船は、Marquesas 諸島の Nukuheva 島に舵を向けることとなる。Nukuheva に到着するとまもなく、主人公は船を脱走し、島の山岳地帯へ逃げこむ。天然の果物で命をつなぎながらここに身を隠し、船の出航を待って下山しようと考えたのである。が、予想に反して食べられるような果物はなかなか見あたらず、山の中をあちこちさ迷い歩くうち、彼は 'the gardens of Paradise' (p. 49) と見紛うほど美しい緑の谷に足を踏み入れる。ところが、何とそこは、人間を 'devour' (むさぼり食う: p. 31) という評判の Typee 族、主人公が出くわすことを最も恐れていた人食い人種の谷だったのだ。こうして主人公は、心ならずも、この蛮族に身をまかせる羽目になってしまう。彼は Typee 族から Tommo (トンモ) と呼ばれ (以後、この論においても、主人公を Tommo と呼ぶこととする) 賓客として思いもかけぬ持てなしを受ける。が、Tommo は、蛮族の心を左右するという 'fickle passions' (気まぐれな感情: p. 76) がおそろしくてたまらな

いし、また、放浪の際に痛めた足がなかなか直らないので、どうしても愉快的気分にはなれない。そうするうちに一月が過ぎ、どういうわけか、この足の炎症が全く突然に直ってしまう。健康の回復と共に、Tommo の心も軽やかになり、彼は新しい興味を持って自分の回りのすべてのものを見ることが出来るようになった (p. 131)。

それでは、Tommo が迷いこんだ *Typee* 谷とはいったいどのような世界だったのであろうか。それは、一方を海に、残る三方を何百フィートもの高い断崖によって閉ざされた ('hemmed in' p. 49) 世界である。この自然の要塞のような地形のおかげで、この谷においては、外からの影響を何ら受けることなく、ほぼ原始のままの生活が営まれているのだ。この谷は、全く楽園のような自然条件に恵まれている。ここでは、人はいつも 'fine day' を期待することが出来る。何しろ、毎日毎日が 'summer and sunshine' の一日であり、一年は 'one long tropical month of June just melting into July.' (p. 213) なのであるから。そして、このような気候と豊かな土壌が、自然に、食料となるパンの実やココナツをあり余るほど育ててくれるのだ。だから、*Typee* 族は食べるために額に汗して働くということを知らない。'The penalty of the Fall presses very lightly upon the valley of *Typee*;' (人類が原罪によってこうむった罰は、この谷においてはごくわずかしその影を落していない: p. 195) のである。

このように、ほとんど一切の労働を免れていると言ってい *Typee* 族の主な仕事と言え、必然的に食べることに眠ることである。彼らは、朝は陽が高く昇った頃に起き出し、朝食一昼寝一昼食一昼寝一夕食という生活パターンを毎日繰り返している。'To many of them, indeed, life is little else than an often interrupted and luxurious nap.' (人生とは、彼らの多くにとって、しばしば中断される甘美なうたたねに他ならない: p. 152) のである。

彼らは知的には未だ眠りの状態にあり、あまり、

ものを深く考えるということをしていない。⁹⁾ ただ、食べ、眠り、そしてその時々ささいな出来事に楽しみを見い出して (p. 144)、毎日を愉快地過ごしている。彼らは 'that all pervading sensation ..., the mere buoyant sense of a healthful physical existence.' (あの全身に満ちわたる感じ、健康な肉体的存在が生み出す。ただ浮き浮きした感じ: p. 127) を体一杯に感じている。つまり、*Typee* 族は、まだ知的には未発達で、動物的な純粋な生命の喜びを感じている状態、ごく幼い、自意識を持たない子どものような状態¹⁰⁾ にあるのだ。このような彼らは、もちろん、文明人の 'cares, griefs, troubles, or vexations' を知らない。ここには 'cross old women' も 'cruel step-dames' も 'melancholy young men' もいない。皆が上きげんなのであり、Tommo がうらやましくなるような 'the perpetual hilarity' (永遠の歓喜: p. 126) が谷全体に満ちあふれているのである。

このように素晴らしい自然環境の中で自然のままに生活している *Typee* 族は、美しい肉体に恵まれている。'On beauty of form they surpassed anything I had ever seen,' (p. 180) と Tommo は言っている。酋長 Mehevi は 'one of Nature's noblemen' (p. 78) であるし、谷の美女 Fayaway は 'the very perfection of female grace and beauty.' (p. 85) である。彼らは皆健康で、病気の者はほとんど見られない。'natural deformity' (生まれつきの不具: p. 180) は皆無であるし、ただ、他の部族との戦争において受けた傷跡をとどめている者がごくわずかいるだけである。このような *Typee* 族の肉体的完全さは、*Typee* 以降の Melville の作品世界に登場する多くの人物が、荒々しい世界との遭遇によってであろうか、不具となり病んでいるという状況¹¹⁾ とよい対照をなしている。

彼らはまた美しい心の持ち主でもあるようだ。Tommo がこの谷で生活するようになって一番驚いたことは、人食い人種として恐れられている彼らが実際の生活においては 'so pure and upright'

であり、毎晩美しい祈りを唱える文明人よりもはるかに 'kindly' で 'humane' (p.203) であることであった。谷に棲息している鳥や動物たちもすっかり彼らに馴れていて 'the kindness of man' (人間の親切さ: p.212) を信じているようであり、Tommo は、「この谷で数週間過ごした後では、私は以前よりも人間性を高く評価するようになった。」¹²⁾ と言っている。

一方、Typee 族の社会に目を向けてみると、そこには文明国に見られぬような秩序・調和が存在する。とは言っても、彼らの社会に強力な法律があるわけではなく、むしろ、住民の行動を規制する力を持つようなものはタブー以外には何もないと言ってよいのだ。いわゆる法律なるものは全然存在しないし、結婚の絆はゆるやかなものであるし、¹³⁾ 宗教は 'a sort of childish amusement' (p.174) にすぎない。要するに、Typee 族はタブーを除いては、どのような人間の作った法律にも神の法律にも従わない 'the independent electors' (自由な選挙民: p.177) なのだ。それなのになぜ、彼らの社会にはキリスト教国もかなわぬような秩序が保たれている (p.200) のだろうか。Tommo は、これは 'an inherent principle of honesty and charity towards each other' (隣人に対する正直と愛という、人間に本来備わっている道義) 及び 'perception of what is just and noble' (何が正しくて高潔なことであるか認識する力: p.201) を Typee 族が持っているからだと言う。しかし、ここで考えられるもう一つの理由は、Typee の社会が住民間の差が少ない原始社会であり、しかも外界からの刺激のない閉鎖社会であるということだ。このため、盗みなどはする必要もないし、また皆が同じ条件下で生活しているので、誰もが同じように考え行動するようになる、¹⁴⁾ すなわち、'the unanimity of feeling' (感情の一致: p.203) がおこるわけである。彼らの間には意見の違いなどありえないので、議論もケンカもおこらず、¹⁵⁾ 秩序が保たれているわけだ。ともかく、ここでは「美德はうるさく説かれずとも、

いわば無意識のうちに実行されているよう」(p.192) であった。このように、Typee 族の美質に目を開かれた Tommo は、驚き感心して叫ぶ、Typee 族と我々文明人(西洋人)とはいったいどちらが本当に 'savages' (蛮族) なのだろうか。むしろ、西洋人こそ、キリスト教布教という美名のもとに、南海の無垢の島々を侵略している強欲な 'hive' (蜂: p.195), 'vipers' (毒蛇: p.26), 'white cannibals' (白い人食い人種: p.69) ではないのか、と彼は痛烈に非難している。

Typee 谷とは、自然の好条件に恵まれた原始的楽園であると言ってよい。そこは、海と高い山々によって、外界から完全に隔てられ守られた、閉ざされた庭である。そこでは何の変化もおこらない。時が止ったような静止した世界なのである。そこに住む Typee 族は、健康で心も姿も美しい永遠の 'child of nature' (自然の子: p.86) であり、彼らの社会には西欧文明国にはない陰りない喜びと、秩序・調和が存在しているのだ。このような Typee 谷はやはり一種の理想郷なのであり、Tommo はこの谷を 'paradisaical abode' (天国のような住みか: p.195), 'Eden' (p.87, 181) と呼んでいる。また、この谷にはカナンイメージも重ねられているのであり、ある時たまたま湾に入った外国船と物々交換をするため、バナナを肩にかついだ棒につるして運ぶ原住民の姿は、モーゼのもとにカナンのぶどうを持ち帰る密偵の姿にたとえられている。

There went two, who at a little distance might have been taken for the Hebrew spies, on their return to Moses with the goodly bunch of grapes. One trotted before the other at a distance of a couple of yards, while between them, from a pole resting on their shoulders, was suspended a huge cluster of bananas,.... (p.107)

And they [the spies] came unto the

brook of Eshcol, and cut down from
thence a branch with *one cluster of grapes*,
and *they bare it between two upon a staff*;

(旧約聖書, 民数記 13: 23)

最初が *Typee* からの、そして二番目が旧約聖書からの引用であるが、前者にはその diction に至るまで後者の echo があることは明白であろう。モーゼは神から与えられた約束の地カナンに入る前に、その地が良き地であるかどうか調べさせ、また同時に 'the fruit of the land' (その地の果物: 民数記, 13: 20) を取ってこさせるために二人の密偵を放ったと旧約にしるされている。密偵はカナンのぶどうを持ち帰り, "surely it [Canaan] floweth with milk and honey; and this is the fruit of it" (民数記, 13: 27) と報告した。そしてモーゼは、そのぶどうから、カナンが良き地、約束の地であることを知ったのである。上にあげた *Typee* の一節においては、原住民の姿の上にモーゼの密偵の姿が重ねやきされており、原住民が運ぶ *Typee* 谷の 'a huge cluster of bananas' はカナンの 'goodly bunch of grapes' であり、*Typee* 谷は良き地、約束の地カナンである¹⁶⁾ ことが暗示されている。

Tommo は、当時、まだ多くの人々が希望実現の地と考えていたアメリカから捕鯨船で脱出、そしてさらに、それ自身アメリカ社会の延長といえる捕鯨船から南海の蜚島へ脱出し、そこにエデンでもありカナンでもある地—理想郷—を発見したのである。貧しい船員である Tommo にとって、アメリカはカナンではない。むしろそれはイスラエル民族が脱出したエジプトに等しいものであって、アメリカのはるか西にある Marquesas の *Typee* 谷こそカナンなのだ。ここに我々は、アメリカ社会に若くして失望した Melville の、自国に対する強烈なアイロニーと批判精神を見ることが出来る。

さて、このように *Typee* 谷に理想郷を発見した Tommo は、意識的にまたは無意識のうちに、*Typee* 族に同化する動きを示すようになる。まず

第一に、彼は文明人が持つ、時の感覚、歴史的時間の感覚を失い ('Gradually I lost all knowledge of the regular recurrence of the days of the week,' p. 123), 無時間の中に漂うようになる。そして、この「幸福の谷」(p. 124) が提供してくれる、おいしい食事や眠りなどのぜいたくな安楽, 'temporary enjoyment' (かりそめの楽しみ; p. 118) の中に、自分の今までの生活のすべての悲しみと記憶を埋めてしまおうとするのだ。

I flung myself anew into all the social pleasures of the valley, and sought to bury all regrets, and all remembrances of my previous existence, in the wild enjoyments it afforded. (p. 144)

そして、こうすることにより、彼は 'feelings of perfect charity for all the world' (全世界に対する愛: p. 149) を感じるようになったのである。すなわち、Tommo は文明人としての記憶を捨て、*Typee* 族の生き方に染まり、生の喜びのみを感じる子どものような状態に帰る¹⁷⁾ ことによって、世界と和解したのだといえよう。そして、このような内面の変化を象徴するかのごとく、Tommo は今までの般員服を脱ぎ捨て、*Typee* 族の民族衣装であるタパを身につけたのであった。

— 3 —

だが、結局、Tommo は *Typee* 谷にはとどまらなかった。逃げ出してしまうのである。そして、この作品の最大の興味は、なぜ、上述のような内面の変化を経験したはずの Tommo が最後には *Typee* 谷を脱出しなければならなかったのかというところにある。

その最も根本的な理由は、既に D. H. Lawrence が指摘しているように、¹⁸⁾ 一度、原始の知的眠りの状態を抜け出した者は、もう二度と、その状態には戻れないのだということである。たとえ、どんなにそれが好ましいものに見えようとも、そう

いった状態に戻ることは、近代人にとっては知的な死であり、自我を埋葬すること、自己の identity を失うことに等しいのだ。それは、近代人としての問題を、解決することによってではなく沈黙させてしまうことによって、世界と和解することなのだ。Tommo がおぼろげながらもこの identity 喪失の危険性に気づいているらしいことは、彼が、Typee 谷における自分の状態について述べる時に、'bury' (埋葬する) という言葉を多用していることから見て取れる。例えば、彼はこの谷のことを 'the verdant recess in which I was buried,' (私が埋められている緑の幽谷: p. 124) と呼び、さらに、'I sought to bury all regrets, and all remembrances of my previous existence, in the wild enjoyments it afforded.' (前出) と言っている。

また、Typee 谷での滞在が長くなりここの風物にも慣れてくるにつれ、Tommo は次第に退屈になってくるのである。変化の著しいアメリカ社会で生活していた彼には、静止した社会に長くとどまることなど耐えられないのである。「いったいどのようにして自分は、この狭い谷で一生を過ごすことが出来るというのか？」¹⁹⁾ と彼は自問している。こうして一時は理想郷のごとく見えたこの谷も、時がたつにつれ、Tommo を閉じこめる牢獄へと姿を変えてくる。

But I had now been three months in their valley,...; I had grown familiar with the narrow limits to which my wanderings had been confined; and I began bitterly to feel the state of captivity in which I was held. (p. 231)

興味深いことは、この時期に、今までおさまっていた足の痛みがぶり返したことである。この足の痛みには、象徴的な意味あいがあると思われる。この痛みは、Tommo が Typee 谷に入る前の放浪中に起こった。おそらく、'some venomous

reptile' (毒蛇: p. 48) にかまれたものであろうと彼は言っている。蛇とは言うまでもなく、人間に知恵を、文明を持たらしたものであるから、それに Tommo がかまれているということは、彼が文明人・近代人であるということの象徴である。Typee 谷の薬草は「足の痛みをやわらげはするが、完治させることは出来ない」²⁰⁾ 一すなわち、Typee 族の、知的眠り、純粋な生の喜びという治療法では、Tommo が感じている文明人としての痛み、彼の文明人としての identity を消し去ることは出来ないのである。健康な Typee 族の間を一人だけびっこをひいて歩く Tommo の姿は実に印象的で、この谷において彼のみが文明という病を患っているアウトサイダーであることを雄弁に物語っている。

折しも Tommo がこのような状態に陥っている時に、Typee 族が、彼らの習慣に従って顔に入れずみをするようにしつこく迫るという事件が起こった。顔に入れずみをするということは、完全に Typee 族の一員になったという意味を顔に刻みつけることであり、それゆえ、永久に故国アメリカには帰らないという決心をすることに等しい。このような決定を迫られて Tommo は 'No' と答えるが、Typee 族はなかなかあきらめず、ここに至って、今まで彼の心の中でくすぶってきた脱出への願いが一気に燃えあがる結果となった。

しかし、Tommo が Typee 谷を脱出したのには、実は、もう一つ、大きな原因があったのである。つまり、彼は最後の最後になって、Typee 族の cannibalism (人食いの風習) の証拠を発見してしまったのだ。

実のところ今までにも、Tommo がこの谷を出たいという素振りを見せた時など Typee 族の顔に急に 'savage expression' (p. 142) が現われ、彼を不安な気持ちにさせたことが一度ならずあった。また、夜遅く、たいまつに照らし出された Typee 族の姿は、時折、Tommo の目には 'so many demons' (p. 33), 'a set of evil beings' (p. 227) と映ることもあった。しかし、うわさに

聞いていたような cannibalism が行われているようすはなく、彼は安心していたのである。

ちょうど、脱出したいという Tommo の願いがたかまってきた頃、隣の谷の Happar 族との間に小ぜりあいが起こった。この戦いは Typee 方の勝利に終り、Tommo は凱進行列を見に出かけてゆく。そして行列の真中に、奇妙な荷物を運ぶ四人の戦士の姿を目撃するのである。

In the midst of them [the crowd of islanders] marched four men, one preceding the other at regular intervals of eight or ten feet, with poles of a corresponding length, extended from shoulder to shoulder, to which were lashed with thongs of bark three long narrow bundles, carefully wrapped in ample coverings of freshly plucked palm-leaves,.... Here and there upon these green winding-sheets might be seen the stains of blood, while the warriors, who carried the frightful burdens displayed upon their naked limbs similar sanguinary marks. (p. 235)

このシーンは、前出の、原住民が浜へ果物を運ぶシーンをふまえて書かれたものと考えられる。両者の間には明らかな相似点が見られる。ただ違っているのは、上の引用においては、原住民が運んでいる物が、カナンのぶどうに値する ‘a huge cluster of bananas’ ではなく、‘the three long narrow bundles’, ‘the frightful burdens’ であることだ。この包みの中身が殺された敵方の戦士の遺体であることは、前後の文章から明らかであろう。つまり、Melville はここで、カナンの地と思われた Typee 谷の果物 (‘the fruit of the land’) とは実は人肉で、Typee 族はそれを食う人食いであり、ここは良き地、約束の地ではないことを暗示しているのである。これは Melville 独特の凄絶、グロテスクなアイロニーであり、この作品の

構造はカナン・イメージを軸としたアイロニーの二重構造になっているといえよう。

行列は the Ti (酋長の住居) に着き、まもなく祭が始まった。祭の間は、どのようにたのんでもこの住居のそばへは行かせてもらえず、Tommo は不安な時を過ごす。そして、祭の終了後、やっと許されて the Ti に出かけた彼がそこで偶然に発見したものは、ふた付きの木皿の中の ‘the disordered members of a human skeleton,...’ (まだ、ところどころに肉のかけらがついている、バラバラになった人骨: p. 238) だったのである。あんなに高潔で親切に見えた Typee 族が人食いであったのか、自分も結局は彼らに食われる運命なのかもしれない——理想郷は今や閉ざされた恐怖の牢獄と変貌する可能性を見せ、脱出したいという Tommo の願望はいよいよ決定的なものとなったのである。

さて、ここでこの作品を最初から振り返ってみると、‘devour’ (むさぼり食う) という言葉がまるで不気味な undertone のように、ひんぱんに使われていることに気づくのである。²¹⁾ 二三、例をあげてみると、Dolly 号船上においては、薪にっていた樹皮は豚に食われ (devoured)、その豚は船長に食われる (p. 4)。白人は南海の島を侵略し、飢えている原住民の目の前で、その島の果物をむさぼり食ってしまう (p. 196)。そして、その白人の Tommo は、Typee 族に食われることを恐れる (p. 233)、といった具合である。つまり、人間をはじめとしてこの世の一切の生物は皆、食いあっているのだと、Melville はほのめかしているのではないだろうか。たとえ、どのように善良な人間でも、この世の cannibalism の罪 (互いに食いあうことの罪) を免れてはいないのであり、様々な美質にもかかわらず、Typee 族もまた、悲しくも、この例外ではなかったのである。このような思想は、後年の *Moby-Dick* の中心的モチーフの一つ ‘vultureism of earth’ (この世の秃鷹道: p. 307)²²⁾ や、‘Cannibals? who is not a cannibal?’ (人食い人種だって? いったい誰が人食い

でないというのか?: p.229) という Ishmael の叫びに発展してゆくものと思われる。

— 4 —

Typee は今や急速にその結末へと向かいつつある。Tommo が *Typee* 谷に入ってから四ヵ月以上もたったある日のこと、ついに、彼が待ち望んでいた脱出の機会が訪れた。海岸にボートが着いたとの知らせに、彼は *Typee* 族に懇願し、今まで近づくことさえ許されなかった海岸へ行く許しをもらう。久しく谷に閉じこめられ、絶えて聞かなかった波の砕け散る音を聞いた瞬間、彼の心はおさえきれぬ歓喜で一杯になった。海岸には、彼のことを伝え聞いて品物と引き換えにその自由を買い取りに来た *Karakoe* がいた。そして、Tommo を渡すかどうかに関し *Typee* 族の間に激しい議論がおこり、拳固がとびかい、血が流される ('blows were struck, wounds were given, and blood flowed.': p.250)。こんなことは今までの *Typee* 族——隣人に対し正直と愛をもって処し、皆の意見が一致するためケンカどころか議論さえもおこらない——には見られなかったことだ。以前の静かなる秩序・調和とは打って変わった 'the blended confusion of sounds' (入り混じり混乱した音響; p.248) が、今海岸の彼らを支配している。つまり、閉ざされた庭に投げ入れられた異分子 Tommo の存在によって、*Typee* 谷の秩序があやうくなっているのである。²³⁾ そして、あのように完ぺきに見えたこの谷の秩序も、実は外からの刺激によって簡単に崩れるものであり、住民の徳というよりは社会の閉鎖性によるところが大きかったことが暗示されている。

さて、*Typee* 族は Tommo の回りを取り回し、次第にその性格の戦闘的な面をあらわにしていく。何本もの投げ槍が彼に向けられ、'the detestable word "Roo-ne! Roo-ne!"' (あの忌むしい言葉、'ルーニ! ルーニ!': p.249) が彼の四面で叫ばれる。この "Roo-ne!" という言葉は、坂下昇氏によれば、縮め首の工作「焼く」の「プー

ニ」または「クーニ」だという。²⁴⁾ ただ、このような状況の中で、Tommo と一つ屋根の下ですっと生活を共にして来た老人 *Marheyo* とその家族のみは、彼の心情を理解し、²⁵⁾ 彼を逃がしてやろうとする。ついに、Tommo はわずかの隙を見つけて、ボートに飛びのり岸を離れるが、*Typee* 族はあきらめず、片目の *Mow-Mow*²⁶⁾ らが泳いで追って来る。ボートはまもなく追いつかれてしまい、ボートをひっくり返そうとした *Mow-Mow* を、Tommo は渾身の力をこめてボート・フックでなぐった。この蛮勇のおかげで、彼らは脱出に成功するのだが、ボートの航跡に浮かび上がって来た *Mow-Mow* の「狂暴な形相を私は生涯忘れることはないだろう」²⁷⁾ と Tommo は語っている。一度は *Typee* 谷を理想郷と思い、*Typee* 族に同化しかけた Tommo であったが、結局は、彼と *Typee* 族の関係は、暴力対暴力——あの *Dolly* 号上の人間関係にも似た、cannibalistic な関係——に終わってしまったのである。Tommo はこの谷に来た時と同じ放浪者として、再びあてもなく海へ出てゆく。そして一方、異分子を吐き出した *Typee* 谷は、再びもとのように閉ざされ、以前の静謐を回復するのである。

— 5 —

その後、Tommo がいったいどうしたかは *Typee* の次の作品 *Omoo* に描かれているところである。Tommo²⁸⁾ をボートから拾い上げたのはシドニーの捕鯨船であったが、この小さな文明社会にも秩序ない ('the vessel was in a state of the greatest uproar: p.13).²⁹⁾ 船長は病気であるし、船員たちは 'villains of all nations and dyes;' (あらゆる国籍のならず者) で構成されていて、航海士が拳骨や足けりの 'knock-down authority' (ノックダウン式権威: p.15) を振り回してやっと服従させているような状態である。ところがついに、船員の間から反乱が起こり、船は仕方なく *Tahiti* 島に寄港する。

Tahiti 島は、墮ちたエデンと呼ぶのがふさわ

しかろう。その自然はまるで ‘the Garden of Eden’ (p.66) のように美しい。のみならず、最初にこの島が西洋人によって発見された時には、
 「住民の肢体の美しさと気立ての良さは、その地の気候の温暖さと完全に調和していた」(p.66) という。ところがその後、西欧諸国のキリスト教伝道団や船員が入りこむようになり、さらに最近、無理やりフランスへの割譲が締結されて、今では ‘every thing in Tahiti was in an uproar.’ (何もかもが混乱状態にあった: p.75) のである。白人との接触が始まってから原住民の間の病気は増加し、道徳も低下してきた。そして、西欧から伝えられた福音——キリスト教や民主主義——は依然不消化のまま、³⁰⁾ Tahiti 独自のもの——伝統的なタバや道具作り、スポーツなど——は今や失われつつあるのだ。Tahiti 人は「野蛮と文明のそれぞれの悪が合流した状態に静止したまま、やがて滅びるだろう」(p.192) と、Tommo は悲観的な予想を述べている。彼らの ‘the Tree of Life’ (p.262) であるココナツの木を追い払って、外国産のバンジローが肥よくな沖積層の平地に驚くべき速さで広がりつつあるさまは、外部からの力が Tahiti に浸透し、それを滅ぼしつつある現状の現事な象徴となっている。

Alluvial flats bordering the sea, ... are overgrown with a wild, scrub guavabush, introduced by foreigners, and which spreads with such fatal rapidity, that the natives, standing still while it grows, anticipate its covering the entire island. (p.261)

このような Tahiti 島の各地を Tommo は歩き回るのだが、どこにも彼がとどまるべき場所はない。一例をあげれば、彼がしばらく滞在していた Martair の谷は地形こそ Typee 谷に似てはいるが、そこには荒地を耕すという苦しい労働があり、また、労働の後の眠りさえも ‘that enemy of all repose and ruffler of even tempers’ ³¹⁾ であ

る蚊、Typee 谷には存在しなかった蚊の大群によって妨げられてしまうという状態で、Typee 谷には比ぶべくもない。結局、Tommo はまた海に出る。‘Omoo’ (放浪者) というこの作品の題名にふさわしく、Tommo は最後まで、どこにもとどまることを知らぬ南海の放浪者なのである。

— 6 —

以上、*Typee*, *Omoo* という Melville のごく初期の作品を見てきたが、それでは、この二作を Melville の作品系列の中に置いてみた場合、そこにどのような意義を見い出すことが出来るのだろうか。

前述のように、この二作は Melville の実際の体験を下敷きにして書かれたものであり、ある程度、彼自身についての物語であるともいえるのである。若き Melville は故国アメリカでの苦しい模索に疲れ果て、「どこでもよい、この水平線のかなたなら」³²⁾ という気持ちで海に飛び出して来た。その彼にとって、アメリカとは全く異った Typee の原始的社会は極めて魅力的なものであっただろうし、また、そこで、近代人としての自我や問題を忘れ去り、子どものようにひたすら楽しみにうち興ずることは、しばしの間の申し分のない休息となったことと思われる。杉浦銀策氏の指摘にもある通り³³⁾、アメリカを希望実現の地と考える楽天的思想が支配的であった時代に、早くもそのアメリカに幻滅したかのように、はるかな蛮島に理想郷を求めようとした点に、既に Melville の特異性があらわれていると言ってよい。

にもかかわらず、Melville 自身はこの谷にずっと、とどまろうとは一度も考えたことはなかったのではないだろうか。たとえ、近代文明とは一種の病であろうとも、そしてどんなにこの生活が楽しかろうとも、Typee 族に同化することは自らの identity 喪失につながると、彼ははっきり認識していたに違いない。そして、Melville のこの心理は、我々読者にもよく理解出来るところである。

しかし、それではなぜ Melville は、Tommo に Typee 族の cannibalism の証拠を発見させるなどという設定をしたのであろうか。というのは、今日では Melville 自身は滞在中に cannibalism の証拠など何も発見しなかったことが明らかになっているからである。³⁴⁾ むろん、これには、世の中に売り出そうという青年作家として、読者の興味をそらさぬよう、作品を出来るだけドラマティックなものにしなければならなかったという事情もあろう。しかし、筆者はそこに、何かもっと Melville の本質に深く根ざした原因の存在を感じるのである。Melville が Tommo に cannibalism の証拠を発見させ、Typee 族を完全には善なるものとはせず Typee 谷を完全なる理想郷とはしなかったという事実、これは、彼の存在の根本にある pessimism が半ば無意識のうちにあらわれ出た結果なのではないだろうか。この pessimism は、一つには、Melville 自身の幼時からの体験——12歳で庇護者としての父を失い、年若くして世の中に出され、様々な折を経験した——から来たものと考えられるが、また同時に、それは彼の宗教的背景の所産でもあろう。すなわち、Melville はカルヴァン主義を奉じるオランダ改革派教会で洗礼を受けたのであり、「人間はアダムの原罪以来、とうてい救われぬ悪の性質を持つものであって、そのような人間の靈魂を救うことに関しては、神には何の責任もない」というカルヴァン主義の教えは、幼い頃から彼の頭にしみついていていたと思われるのである。

Melville は Typee においてこの世の理想郷を描きながらも、ついにそれを完全な理想郷として描ききることは出来なかった。理想郷を描く彼の筆は、既に pessimism に染まっていたのである。彼がほぼ 50 年に及ぶその作家生活の中で描きえた最も美しい人間たち——楽園的自然の中の、生まれたままのような、最も無垢に近い人間たち Typee 族——も結局は、人食いにすぎなかった。一見、明るくおおらかに見える Typee の世界にも恐怖は内在している。この世は暴力対暴力の

cannibalistic な不協和音の世界であって、理想郷はどこにもなく、Tommo の旅は完結することのない漂泊なのである。Typee, Omoo という作品の本質は、ここかしこにあふれているユーモアにもかかわらず、そう明るいものではない。そして、このような Melville の pessimism は、この二作を出発点として、やがて、Mardi, Moby-Dick, Pierre などの壮大な作品において、より複雑で豊かな表現を与えられることとなったのである。

註

- 1) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (The Scribner Library の *Three Novels of F. Scott Fitzgerald* に収録), p. 137. なお、以下、引用文中の断りのないイタリック体の使用や〔 〕内の書き入れはすべて筆者による。
- 2) 浜田政二郎, 「ユートピアとアメリカ文学」(研究社), p. 8 参照。
- 3) *ibid.*, p. 9 参照。
- 4) 1839 年には、家具まで売りに出したという。Jay Leyda, *The Melville Log* (New York: Gordian Press, 1969) の第 1 巻 p. 96 参照。
- 5) *The Melville Log* の第 1 巻 p. 85 に収録されている 1839 年 5 月 23 日付の母 Maria の手紙には、'Herman has gone out for a few days on foot to see what he can find to do—' とあり、翌 24 日の兄 Gansevoort の手紙には 'Herman has returned from his expedition, without success—' とある。
- 6) 'I had learned to think much and bitterly before my time; all my young mounting dreams of glory had left me; and at that early age, I was as unambitious as a man of sixty.' という Redburn の一節などに当時の Melville の心境があらわれている。
- 7) Melville, *Redburn His First Voyage* (The Northwestern-Newberry Edition の 1969 年版), p. 10.
- 8) Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life* (The Northwestern-Newberry の 1968 年版), p. 3. 以下、この作品からの引用はすべて上の版による。
- 9) Typee は、「私」と名乗る船員が三年前の Marquesas での体験を物語るという一人称の語りの形式を取っている。Melville は、彼自身の純粋

な体験談という触れ込みで *Typee* を発表したのだが、今日ではこの作品は彼の創造力の産物でもあったことがはっきりしているので、「私」なる人物がそのまま Melville であるとは言い難い。

- 9) 'the thoughtless inhabitants' (p. 174).
- 10) *Typee* 族の描写には子どものイメージがある。例えば、彼らが火をおこす時のようすは次のように描写されている。'The islander, placing the larger stick obliquely against some object,... mounts astride of it like an urchin about to gallop off upon a cane,...' (p. 111).
- 11) 例えば, *White-Jacket* に描かれているアメリカ軍艦内の人々, また, *Moby-Dick* の片足の Ahab 船長など。
- 12) 'I will frankly declare, that after passing a few weeks in this valley..., I formed a higher estimate of human nature than I had ever before entertained.' (p. 203).
- 13) 'the matrimonial yoke sits easily and lightly,' (p. 192).
- 14) 'They all thought and acted alike.' (p. 203).
- 15) '...I never witnessed a single quarrel, nor any thing that in the slightest degree approached even to a dispute.' (p. 204).
- 16) *Typee* 族の主食となっているパンの実は 'the milk-white interior' (p. 115) を持ち, ココナツの汁は 'a thick creamy milk' (p. 116) となる。ここにも「乳と蜜の流れる地」カナンのイメージがある。
- 17) Tommo は, 彼ら自身子どものイメージを持つ *Typee* 族から子どもとして扱われている。Tommo の従僕 Kory-Kory は彼に自分の手で食べさせてやり, 彼の気げんが悪くなると, おどけた身振りをして気げんを取ろうとする。また, *Typee* 族は彼のことを 'a froward, inexperienced child' (p. 89) として見ることしばしばである。つまり, Tommo には子ども (*Typee* 族) の中の子どもというイメージがある。
- 18) D. H. Laurence, *Herman Melville's Typee and Omoo*, pp. 15-16.
(Richard Chase 編, *Melville: A Collection of Critical Essays*, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1962, に収録)。
- 19) '...how should I be able to pass away my days in this valley...?' (p. 239).
- 20) '...despite the herbal remedies of the natives,

it [my melody] continued to grow worse and worse. Their mild applications, though they soothed the pain, did not remove the disorder, ...' (pp. 97-98).

- 21) Edwin Haviland Miller, *Melville* (New York: Persea Books, Inc., 1975) 参照。
- 22) Melville, *Moby-Dick or, the Whale* (Hendricks House の 1962 年版)。
- 23) *Typee* 側から見れば, Tommo はこれまでもタブーを破って女性をカヌーに乗せたり, いれずみを拒否したりして, この谷の秩序を乱す行動をしていたとも言える。
- 24) 坂下 昇訳, メルヴィル全集第 1 巻「タイピー」(国書刊行会, 1981 年), pp. 228-229.
- 25) 'In the midst of this tumult old Marheyo came to my side, and I shall never forget the benevolent expression of his countenance,...' (p. 248).
- 26) この男は, *Typee* 族の中でほとんど唯一のかたわの (deformed: p. 236) 人間である。
- 27) '...and never shall I forget the ferocious expression of his countenance.' (p. 252).
- 28) 主人公は *Typee* 谷脱出と同時に Tommo という名を捨て去ったのであり, 彼を引き続きこの名で呼ぶのは本当は適切ではないが, この論においては便宜上, この呼び方で通した。
- 29) Melville, *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas* (The Northwestern-Newberry の 1968 年版), p. 14.
- 30) Tahiti 版におけるキリスト教の状態については第 44~46 章を, 民主主義の状態については第 79 章 (皆が勝手に発言するため大混乱となった裁判の描写がある) を参照。
- 31) *Typee*, p. 212.
- 32) Lawrence, p. 13.
- 33) 杉浦銀策, 「メルヴィル——破滅への航海者」(冬樹社, 英米文学作家論叢書 8), pp. 20-21 参照。
- 34) *The Melville Log*, 第 1 巻, p. 137 参照。

尚, *Typee* よりの引用文の訳については, 坂下昇氏の訳 (前出) を一部参考にさせていただいた。

また, 本小論は, 拙稿「メルヴィルの『タイピー』について」(東京大学大学院英文学科同人誌「ろん」第 9 号—1974 年発行—に収録) を発展させたものである。